

「登校することが難しい児童への支援」

1 学校概要

本校は、愛知県内で唯一の病弱虚弱の児童生徒のための特別支援学校である。通学、施設内教育、訪問教育の3つの教育形態がある。

2 発表概要

(1) はじめに

本校の施設内教育は、3つの病院で行われている。その中の1つである病院の施設内学級には、小学部と中学部合わせて5～10名ほどの児童生徒が在籍する。平成24年度までは、腎臓疾患や心療系疾患の子どもが多く、その数は年々減少しつつあった。しかし、平成25年度からは、小児がんの子どもが多く在籍するようになった。そのため、治療や病状の変化によって、施設内学級に毎日登校することが難しい児童生徒が多く在籍するようになった。

(2) 取り組みの実際

(ア) 学習の支援

児童生徒は、入院期間が長期になると、学習の遅れへの不安を抱くことが多い。授業に参加することが難しい児童生徒へ、病室にて子どものペースで学習できるようなプリントのやりとり等を工夫し、不安感を和らげるよう配慮した。また、前籍校と課題のやりとりを通して、学習効果を上げるように工夫した。

(イ) 行事への参加

施設内学級には、各学期に一つずつ行事が設けられており、どの子どもも行事を楽しみにし、意欲をもって準備にあたっている。しかし、施設内学級へ登校することが難しい児童については、行事とのつながりをもちにくい。そこで、病室で録画したビデオでの参加や、作品出展に対する評価を映像で本人に伝える等を工夫し、疎外感を抱くことがないように配慮した。

(ウ) 友達とのつながり

病室（特に個室）から出られない児童の場合、友達と関わることのできる機会は少なくなるので、寂しそうな様子が見られ、病状への不安がますます大きくなる様子が見られた。そこで、タブレット端末や交換日記等を活用し、友達のメッセージを伝えて、つながっている実感をもてるよう工夫した。

(エ) 保護者との関わり

保護者に子どもの自習する姿や教員との関わりを見ていただき、気分転換を図れるようにした。また、真摯にお話を伺いながら、入院中の不安を少しでも解消できるよう心がけた。

(オ) 病棟スタッフとの連携

毎週行われる学校カンファレンスにて、主治医や担当看護師、保育士と密に情報交換を行った。病室での子どもの様子や、保護者の方の様子を伺い、適切な支援が行えるよう配慮した。

(3) まとめ

長期欠席となる子どもは、個室で過ごす時間が長くなり、病状に対する不安や、治療上のつらさを抱えているケースが多い。どのような状況にあっても、子どものありのままの気持ちに寄り添い、子どもが意志決定できる機会をつくることが大切であり、子どもが前向きな気持ちをもてるきっかけとなるように感じた。そして、子どもや保護者に、どんなときもクラスの一員であることを伝える工夫を積み重ねることが、子どもだけでなく保護者にとっても、支えとなっていく。

(4) 課題

- ・施設内学級の支援の充実
- ・周囲の子どもへの支援